琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「六の宮の姫君」考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/974

芥川龍之介「六の宮の姫君」考

小　澤　保　博*

A consider on Ryunosuke Akutagawa's LADAY ROKUNOMIYA

Yasuhiro OZAWA*

1

芥川龍之介「六の宮の姫君」を論じるのに、最初に北村薫「六の宮の姫君」(「東京創元社」平成四年四月）の作品内容の紹介から始めたい。「六の宮の姫君」は、「空飛ぶ馬」「夜の蝉」「秋の花」に次ぐ北村薫の四作目の異色の文芸推理長編小説である。第一作「空飛ぶ馬」(平成元年三月）では入学間もない女子学生であった主人公は、第四作「六の宮の姫君」では、四年生になり卒業論文に取り組む。彼女は、テーマに芥川龍之介を選ぶのだが、就職内定先の出版社で生前の芥川龍之介と親交のあった鎌倉在住の老作家が、生前の芥川が「六の宮の姫君」について「あれは、玉突きだね・・・・というよりもキャッチボールだ」と述懐していたという話を聞くところから、作品は始まる。

芥川龍之介が、六十数年前に自作「六の宮の姫君」について何気なく洩らした発言の片鱗から、芥川龍之介の創作の一面に明晰な論理により肉薄していく文壇交流をテーマにした文芸推理小説についてその主旨を紹介しておきたい。

「菊池の中央公論の一幕物、非常に好いと思いますがどうですか」(「菅忠雄宛書簡」大正八年九月二十二日）この芥川の言う「菊池の中央公論の一幕物」というのは、菊池寛の戯曲「順番」(「中央公論」大正八年九月）である。狂気の不安に怯える三人の兄弟のやり取りに、既にこの時期芥川は精神の安定を失う自己の運命を重ねてみていたことになる。

「点心」(「池西言水」大正十年二月）では、江戸期の俳人池西言水について批判する正岡子規の論を再批判している。「姨捨てん湯婆に燗せ星月夜」「黒塚や局女のわく火鉢」等子規の批判する句と「御手打の夫婦なりしを衣更へ」(蕪村）「いねかしの男うれたき砧かな」(召波）との相違はないというのが、芥川の主張である。「蚊柱の礎となる捨子かな」の句を取り上げて池西言水の特色は、「万人が知らぬ一種の鬼気を盛りこんだ手際にあると思う」と評した。芥川は、芸術的価値のあると思えない「順番」に対して鬼気を感じたということである。

菊池寛「文芸作品の内容的価値」(「新潮」大正十一年七月）では、芸術的価値がなくても、素材の価値があれば、内容的な価値があると主張して里見弴の批判を受けた。芥川が「順番」に対して鬼気を覚えたのは、作品としての芸術的感興ではなくて素材的に自己の運命の予兆を感じたということであろう。芥川龍之介「小説の戯曲化」(大正十三年二月）で「この間菊池寛は小説『義民甚兵衛』を三幕の戯曲に書直した」と指摘しているが、「義民甚兵衛」に対しても芥川は、個人的には鬼気を感じたことであろう。北村薫「六の宮の姫君」は、明晰な論理展開で芥川作品に菊池寛の作品がいかに影響したか紐解いていく。「六の宮の姫君」成立について菊池寛の作品が、いかに介在したかを論証していく。

*国語科教育教室

「身投げ救助業」（「新思潮」大正五年九月）「死者を嗤う」（「中央文学」大正七年六月）は、菊池寛の体験の反映があるようである。芥川龍之介「往生絵巻」（「国粋」大正十年四月）の一年後に菊池寛「頸括り上人」（「改造」大正十一年七月）が創作されて、それに刺激されて「六の宮の姫君」（「表現」大正十一年八月）が創作された。「六の宮の姫君」は芥川龍之介の菊池寛に対する挑戦により執筆されたという。

菊池寛は「頸括り上人」創作において岩波文庫「沙石集」（「頸括り上人の事」巻四の六）日本古典文学大系「沙石集」（「臨終に執心をそるべき事」巻四の七）を典拠にして創作した。

「西に落ちかかってゐた夕日が、にはかに光明をましたかと思ふと、夕焼の雲が、みな紫に輝き始めて、虚空に、そこはかとなく妙薬がきこえて来るのだった。」（「頸括り上人」）

「沙石集」（「頸括り上人」巻四の六）には、該当する描写はなく「巻四の六」は、往生失敗の仏教説話である。「頸括り上人」創作において、結末の極楽往生の部分は「沙石集」（「日本古典文学大系」巻四の八）の「入水したる上人の事」の往生成功譚の結末部分を使っている。図らずも一年後に菊池寛は、「頸括り上人」において「往生絵巻」と同じ結末を持つ往生成功譚を書いたことになる。

「この法師の死骸の口には、まっ白な蓮華が開いてゐるぞ。さう云へば此処へ来た時から、異臭も漂うてはゐた容子ぢや。では物狂ひと思うたのは、尊い上人でゐらせられたのか。」（「往生絵巻」大正十年三月）

「今まで蛙のやうに、ひしがれてゐた上人の身体から、異香が薫んじほとばしって、その匂が群集の間に、充ち満ち、極楽往生の証、今はかくれなければ、諸人嘲りの心須ち消えて、称名の声、しばらくは、大地をふるはせて起りにけり」（「頸括り上人」大正十一年七月）

芥川龍之介「六の宮の姫君」（大正十一年八月）は、菊池寛「頸括り上人」を自分に対する文学的挑戦として受け取った芥川により執筆されたというのが「六の宮の姫君」（「東京創元社」北村薫）の趣旨である。

芥川は、漱石から文壇を相手にしてはならないという忠告を受け作家生活を始めて、自分でも弟子の堀辰雄に同趣旨の発言を繰り返したが、彼ほどに文壇の動きを気にした作家はいない。友人、知人に残した芥川の膨大な書簡は、このことを今日に伝えている。代表作「藪の中」も愛人を弟子筋の南部修太朗に奪われたことに対しての文学的挑戦として理解する見方も今日では一般化している。南部修太郎に対する敵意が「藪の中」を名作にしたのならば、「往生絵巻」の創作意図を「頸括り上人」によって模倣された芥川龍之介が「六の宮の姫君」創作によって菊池寛に対して文学的挑戦をしたという解釈は、誤りではないと思う。以下、芥川龍之介「六の宮の姫君」について考察する。

2

芥川龍之介「六の宮の姫君」は、「今昔物語」巻十九「六の宮の姫君の夫出家せる語第五」を原典にして「六の宮の姫君」（一～五）を書き上げ、「今昔物語」巻十五「悪業を造れる人、最後に念仏を唱へて往生せる語第四十七」を部分的に典拠にして「六の宮の姫君」（五～六）を創作した作品である。運命のままに流される姫君の生活態度は、「誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだった。姫君も父母の教へ通り、つつましい朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。」（一）

運命を受動的に甘受する姫君の人生に対しての原典を離れた芥川龍之介の突き放した感想は、「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」（六）という作品結末の容赦のない感想を導く前哨戦であり、「六の宮の姫君」（二）に挿入された「今昔物語」巻二十六「東に下る者、人の家に宿りて産に値ひたる語第十九」は、運命に翻弄される一人の女の運命を予兆として暗示している。

以下、「芥川龍之介と古典」（「勉誠出版」長野嘗一）の第十七章「六の宮の姫君」の解説を踏襲した「芥川龍之介」（「明治書院」菊池弘）に拠りながら読解をすすめる。

六の宮の姫君は、実家の経済的衰退に対して無頓着で「姫君は寂しい屋形の対に、やはり昔と少しも変らず、琴を引いたり歌を詠んだり、単調な遊びを繰返してゐた。」（一）さらに「今昔物語」

（巻二十六）の挿話を同棲する「丹波の前司」から聞かされた後も、運命の残酷さに身を震わせながら、「顔だけはあでやかにほほ笑んでゐた。」「姫君は昼は昔のやうに、琴を引いたり双六を打ったりした。夜は男と一つ褥に、水鳥の池に下りる音を聞いた。」（二）自身の私生活上の激変に対しても優雅な身の処し方しか出来ない姫君は、「丹波の前司」に捨てられて六年の年月が流れても生活を変えようとはしない。「しかし姫君は昔の通り、琴や歌に気を晴らしながら、ぢつと男を待ち続けてゐた。」（三）

このような姫君の生き方に作者の何らかの生の声を聞くことは、可能であろう。

六年の別離の後に六の宮の姫君は、「丹波の前司」に代わって別の新しい男「典薬之助」に身を任せることになる。「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢゃ。・・・・・・」（三）六の宮の姫君が泣き崩れて自己の運命を受け入れようとした同じ時刻、前の夫である「丹波の前司」は、新しい妻と共に六の宮の姫君の嘆きの声を聞くのである。「男はふと驚いたやうに、静かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。」（三）この辺の記述には、学生時代ベルグソン「時間と自由意志」に熱中して（「大道寺信輔の半生」（別稿））、後年まで作品内部に神秘主義を内包した作者による無意識の作為と見なし得るし、同時に「六の宮の姫君」を「今昔物語」の素朴な焼き直しではない、深みのある神秘的な作品にしている。「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢゃ。・・・・・・」（三）

「あの音はなんぢゃ？」（中略）「栗の実が落ちたのでございませう。」（三）

姫君が新しい男、典薬之介に身を任せるべき悲しい決意を呟いた時に、常陸の守の娘と正式に結婚していた男は、父の任地先陸奥の国ではなく、常陸の国で姫の苦痛の声を聞くのである。ベルグソンの心霊学の作者による応用であろう。

「六の宮の姫君」の作品構成において作者は、姫君の変わることのない生活態度を描写しながら、生活の激変に耐えられない内的な苦痛を自然との対比で象徴的に描いている。

「姫君は忍び音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶ける為に、体を売るのも同様だつた。（中略）姫君は乳母と向き合つた儘、葛の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしてゐた。・・・・・・」（一）

「姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ恋しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽せない悲しさだつた。（中略）其処へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子や高坏を運んで来た。古い池に枝垂れた桜も、蕾を持つた事を話しながら。・・・・・・」（二）

「その時なぜか男の胸には、はっきり姫君の姿が浮んでゐた。『栗の実が落ちたのでございませう。』常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。」（三）

（一）では、不如意な生活を立て直すために「丹波の前司」に身を任せることになる姫君の体は「葛の葉を吹き返す風の中に」身を曝すことになる。（二）では「丹波の前司」との詮無い別れは「古い池に枝垂れた桜も、蕾を持った」季節の対比で描かれている。そして（三）では、新しい男、典薬之介に身を任せねばならない姫君の悲嘆の声を前の夫「丹波の前司」は、明瞭に落下する栗の実に擬して聞き取るのである。

3

「丹波の前司」は、九年目の晩秋に妻とその家族を同伴して都に帰って来て廃墟となった六の宮を訪れる。荒涼とした寝殿跡は、男に去られた後の六の宮の姫君の運命を残酷に象徴している。神殿の廃墟を彷徨する男の視線に映ずる晩秋の景色は、男に彼の九年間の不在の時間の何であるかを認識させたはずである。

「男は草の中に佇んだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其処には半ば埋もれた池に、水葱が少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひつそりと葉を簇らせてゐた。」

同じ「今昔物語」巻十九「六の宮の姫君の夫出家せる語第五」を典拠にしながら堀辰雄「曠野」では、「もう昔の女には逢われないのだと詮め切ると、それまで男の胸を苦しいほど充たしていた女恋しさは、突然、いい知れず昔なつかしいような、ほとんど快いもの思いに変りだした。・・・」ということになり、余韻のある書き方をしている。

これは芥川龍之介が「拾遺和歌集」収録「今昔物語」転載の和歌「たまくらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける」を其の儘「六の宮の姫君」に収録しているのに反して堀辰雄「曠野」では、別の和歌「忘れぬる君はなかなかつらからで/いままで生ける身をぞ恨むる」(「拾遺和歌集」収録）を作品冒頭のエピグラムに使っている相違にも通じている。

姫君を捜し求める男は、朱雀門の前の西の曲殿で死期近い姫に再会する。

「あれ、あそこに火の燃える車が。・・・・・・」

「金色の蓮華が見えまする。天蓋のやうに大きい蓮華が。・・・・・・」

地獄に堕ちる瀬戸際にある六の宮の姫君のために乳母は乞食坊主を同伴し、法師は南無阿弥陀仏により姫を地獄から極楽往生に導こうとする。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」

「何も、一何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、一冷たい風ばかり吹いて参りまする。」

六の宮の姫君は、結局地獄にも極楽にも往生することが出来ずに中有の闇の中にその魂が漂うことになるのである。「六の宮の姫君」（五）は、先に述べたように「今昔物語」巻十五「悪行を造れる人、最後に念仏を唱へて往生せる語四十七」の往生譚を芥川が恣意的に変形させて作り直した箇所である。この箇所の典拠となった「今昔物語」（巻十五第四十七）の往生譚を「六の宮の姫君」（五）のように変形させるにおいては、作者芥川龍之介の菊池寛に対する競争意識があったことについては、冒頭箇所において既に記述した。

「男はこの声を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯付してしまつた。」（「六の宮の姫君」五）、ここで「今昔物語」（巻十九第五）を典拠にした「六の宮の姫君」は、作品としては終わるのであるが、芥川は典拠にはない「六の宮の姫君」（六）を付け加えて、作品としての駄目押しをしている。堀辰雄「曠野」では、「この女こそこの世で自分のめぐりあふことのできた唯一の為合せであることをはじめて悟ったのだった。」という感想が付け加えられている。「六の宮の姫君」やそれを学んだ「曠野」には、「復活」（トルストイ）の影響があるように思える。

「六の宮の姫君」（六）は、典拠の「今昔物語」を離れた作者による唯一の独創の箇所である。極楽にも地獄にも行くことが叶わず、中有に漂う姫君の魂に対して法師の口を借りて作者は次のような感想を述べる。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

この箇所については、長野甞一に「酷薄な運命に鞭打たれるさえあるに、それはすべて汝の責任だと、最後の審判が下ったに等しい。」（「芥川龍之介と古典」勉誠出版）という批判がある。続けて「六の宮の姫君の哀れな生涯を、美しい文章で同情的に語ってきただけに、（中略）ともすれば感傷に流れ易いこの題材に理知的なしめくくりをつけようとしたらしいが、上人までが寄ってたかってこの哀れな女に最後の打撃を与えたとの感が深い。」とも述べた。この箇所についての繰り返しになるが、以下の事情を再確認する必要がある。

「往生絵巻」（「国粋」大正十年四月）の執筆の後、この芥川の往生成功譚を模倣した菊池寛「頸括り上人」（「改造」大正十一年七月）が発表され、芥川は自らの作品「往生絵巻」の反措定としての作品執筆を迫られたのである。従って「六の宮の姫君」（六）の作品上の駄目押しは、菊池寛の友人として範囲を超えた図々しさに対する芥川龍之介の反撃として読むべきである。

「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声がするさうではないか？」という侍の問いに「お聞きなされ。」と法師が答え。「突然何処からか女の声が、細そぼそと歎きを送つて来た。」と続く。中有に迷う姫君の声を聞く場面には、芥川龍之介好みの神秘主義の発露があり、作品「六の宮の姫君」を陰影のある重層的作品にしているわけである。

作品結末部において侍の存在は、法師の身分を明かすためにある。

「在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人と云ふのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高徳の沙門だつた。」

この問題の結末の箇所は、「感傷に流れ易いこの題材に理知的なしめくくりをつけようとした」わ

けではなくて、芥川龍之介が創作における自己の定番の形を踏襲した結果だと思う。

「タイース」「バルタザール」（アナトオル・フランス）の創作方法を模倣して、六の宮の姫君の哀れな人生を美的な文章で同情的に描き、死してもなおも中有に迷う姫君の霊魂に呼びかける形で高名な実在の慶滋保胤を登場させることで、哀れな六の宮の姫君の存在に現実性を持たせたのである。

作品内部において姫君の生存期間と慶滋保胤のそれとの整合性について、あるいは空也上人と慶滋保胤との師弟関係の有無について作者の配慮があったとは、考えられない。

4

「六の宮の姫君」は、「俊寛」（「中央公論」大正十一年一月）と同列に論じられる作品である。それは「俊寛」成立時の事情による。倉田百三「俊寛」（第一幕「白樺」大正七年三月、第二幕～第四幕「新小説」大正九年二月）に続いて菊池寛「俊寛」（「改造」大正十年十月）が執筆され、二人に対抗する競争心から芥川龍之介「俊寛」が創作された。作品の文学的な価値でいえば、おそらく作品の執筆順で芥川龍之介「俊寛」が一番見劣りするであろう。第一高等学校の同級生で、放蕩無頼の生活を送った倉田百三と菊池寛の二人に「平家物語」を典拠とする同一のテーマの作品で遅れを取ったことが、芥川に素材の斬新さによる対抗意識を起こさせたと思われる。このことが「今昔物語」を典拠とする「六の宮の姫君」を構想させたものと思われる。

菊池寛「青木の上京」（「中央公論」大正七年十一月）の当事者である佐野文夫、彼と組んで放蕩無頼の生活を繰り返して共に学業を放棄した倉田百三については、芥川龍之介の素朴な感想が残されている。「倉田百三が肺病にならなかったら、いま頃はどんなものになっていたか、わかったもんじゃないよ。そうおもうと人生というものはまったく皮肉だねえ」（「わが文学半世紀」江口渙）

芥川龍之介は井川恭ともに学業、品行共に優秀な学生であったが、佐野文夫、倉田百三についての関心は持続していたであろう。二人の学業放棄グループは、菊池寛と共にこの頃芥川龍之介の文学的名声を脅かす存在であった。倉田百三は文学的な名声において、菊池寛は創作実業両面において、そして佐野文夫は満鉄調査部、後には日本共産党の指導的な立場にあった。学校秀才であった芥川龍之介は、時間の流れの中で心理的圧迫を覚え、一種の敗北意識を持ったかもしれない。作品「六の宮の姫君」の内部には、その当時の芥川龍之介の心理的な敗北意識の反映がある。

「今昔物語に就いて」（「日本文学講座」昭和二年四月）において、芥川は「今昔物語」の野生の美しさについて述べたが、「今昔物語」を典拠とする最後の作品「六の宮の姫君」は、はからずも優美で繊細な美しさを持った作品となった。「今昔物語」の同じ作品を典拠とする堀辰雄「曠野」（「改造」昭和十六年十二月）は、「六の宮の姫君」の二十年後に創作されたが、堀辰雄による芥川作品の深化が見られる。菊池寛「六宮姫君」（「苦楽」昭和二十一年十一月）も同一の話を典拠にするが、作品の文学的な価値からすると作品発表順で芥川龍之介「六の宮の姫君」が、一番優れているであろう。

「六の宮の姫君の話は、今昔物語中最も悲劇的で、印象深いものである。（中略）この題材を捉えたのは流石に彼の眼光の鋭さを語るものであろう。ただ原話がすぐれているだけに、彼の手柄はそれだけ少ない。」（吉田精一「芥川龍之介」新潮文庫）という作品評価が一番妥当であろう。

菊池寛は芥川龍之介の死後「『小学生全集』があんなにゴタゴタを起し、芥川には全く気の毒で芥川と直面することが少しきまりが悪かったので、」（菊池寛「芥川の事ども」昭和二年九月）と回想を寄せたが、菊池寛の気持ちの中では、「往生絵巻」をあからさまに模倣して「頸括り上人」を書いたこと、そのことが芥川に無意識の対抗意識を持たせて「六の宮の姫君」執筆に及んだことも「直面することが少しきまりが悪かった」理由であろう。今日「無名作家の日記」（「中央公論」大正七年七月）を読むと菊池寛の芥川龍之介に対する競争意識は、異常なものがある。佐佐木茂作、南部修太郎、滝井孝作、小島政二郎の「龍門の四天王」の中で南部修太郎は、芥川の愛人を奪い、滝井孝作は志賀直哉の門下に、そして佐佐木茂作は菊池寛の配下になった。小島政二郎のみ生涯師

弟関係を壊さなかったが、こうした芥川周辺の事情も「六の宮の姫君」の創作に影響したであろう。自殺直前に最後のお別れに来た芥川龍之介が、佐藤春夫に対して久米正雄や菊池寛と文学的出発を遂げたのは失敗であったと告白したのは、交友関係の問題ではなくて純粋に創作上の問題として理解すべきである。以上の理由から堀辰雄「曠野」菊池寛「六宮姫君」について考えておきたい。

芥川龍之介「六の宮の姫君」は、彼の志賀直哉訪問直後に書かれた。この作品は当時の芥川の精神的な何らかの危機の反映である。「芥川君は三年間程私が全く小説を書かなかった時代の事を切りに聞きたがった。そして自身さういう時期に来てゐるらしい口吻で、自分は小説など書ける人間ではないのだ、というやうな事を云ってゐた。」(「中央公論」昭和二年九月)

「曠野」(「改造」昭和十六年十二月)も作品成立の事情は「六の宮の姫君」のそれに似ている。典拠は「今昔物語」巻三十「中務の太輔の娘、近江の郡司の婢と成れる語第四」であるが、「六の宮の姫君」の典拠である「今昔物語」巻十五「六の宮の姫君の夫出家せる語第五」も使っている。むしろ典拠は「六の宮の姫君」そのものである。

両作品は、共に作中人物が神秘的な内的な衝動で突き動かされて定められた運命に生きるのである。「曠野」では、二人の決定的な別れは典型的なすれ違いである。

「男は胸を刺されるやうな思ゐをしながら、そちらの方へさらに草を掻き分けて往って、最後に女の名を呼んだ。」(「曠野」二)

「最後に男の声がしたときは、もう女のゐる対の屋からは遠のいて、向ひの尼のゐる対の屋の方へ近づき出しているらしかった。」(「曠野」二)

運命に流された二人の再会も、合理的なそれではなくて神秘的な衝動の結果である。

「その女をはじめて見たときから、守の心はふしぎに動いた。」(「曠野」四)

「何か或強い力に引きずられて往きでもしてゐるやうな空虚な自分をしか見出せなかった。」(「曠野」四)

「曠野」の作中人物を突き動かすのは、本人の意思ではなく目に見えぬ運命の支配である。

「この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出来た唯一の為合せであることをはじめて悟ったのだった。」には、人間の運命に対する神秘主義に傾く感覚がある。

5

「藤十郎の恋・恩讐の彼方に」(「新潮文庫」昭和二十三年三月)の吉川英治の名を借りた自作解説で菊池寛は「戦いに敗れた今日、改めて封建思想の打破が叫ばれなければならぬほど、菊池氏としては、残念至極なことと思っているであろう。」と述べた。公職追放の指令を受けた直後の彼の気持ちが窺えるが、この時期に芥川龍之介に対する文学的な挑戦の気持ちは、既になかったであろう。「新今昔物語」(「柊屋書店」昭和二十二年)には冒頭に「六宮姫君」が掲載されている。この時期、文学的素材を争った倉田百三、芥川龍之介は既になく「青木の出京」の相手である佐野文夫も亡くなっている。井川恭、久米正雄は生存していたが当時の菊池寛には、その存在は佐佐木茂作のようなものであったかも知れない。第一高等学校は既に遠く、説話に近代的な解釈を施して提供する、その方法論の違いで仲間たちと競い合った時代も過ぎ去ってしまった。こうした周辺の事情が、「新今昔物語」(「六宮姫君」)の創作そのものに影響しているであろう。作品執筆一年数ヵ月後に急逝していることも作品形象に影響しているであろう。

「六宮姫君」は、「頸括り上人」のような原典離れはなく、「今昔物語」(「巻十九第五」)の素材を恣意的な解釈を加えることもなく、単調に記述しただけの作品である。それだけ素朴な味わいの作品として評価することは可能だが、競い合う相手そのものを失い、晩年の菊池寛は、覇気を失ったといえる。「ある恋の話」「形」についての自作解説で「およそ、菊池氏の多読博覧は、到るところから、そのテーマを表現するに適当な話を見つけて来るらしい。」と自画自賛した。しかし、その博覧強記を補強し芸術作品に仕上げるには、切磋琢磨する身近な友人が必要である。晩年の菊池寛は、素材を芸術作品にまで引き上げるべき刺激しあう相手を失ったといえる。

「今昔物語に就いて」(「日本文学講座」昭和二年五月)において、自分が惹かれるのは「(野生)

の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。」と述べているが、「今昔物語」を典拠にした作品群の中で最も完成度の高い作品「六の宮の姫君」は、優美などちらかと言えば華奢な作品である。「今昔物語」を典拠にした他の芥川作品「青年と死」「羅生門」「「鼻」「芋粥」「運」「道祖問答」「偸盗」「往生絵巻」「好色」「藪の中」「尼堤」等の中で「六の宮の姫君」は作品的な評価では、一番高い。結局芥川龍之介は、「今昔物語」の「野生の美しさ」に引かれながら、彼の個性は徹頭徹尾「優美とか華奢とか」であったことの証明であろう。

芥川龍之介は「六の宮の姫君」発表一ヶ月前に「一夕話」（「サンデー毎日」大正十一年七月）を発表しているが、この作品が「六の宮の姫君」を考察するときに並列させて論じられるのは、両作品執筆時に作者自身が作品解説を記述しているからである。

「・・・一夕話は一夜漬なり但し僕は常にあの小ゑんの如き意気を壮といたし六の宮の姫君の如きを憐むべしと致し候」（「渡辺庫輔宛書簡」大正十一年七月三十日）

長崎在住の永見徳太郎周辺の作家志望の若者に芥川龍之介は、文学教育の意味合いを兼ねて自作についての飾らない感想を書き記したのである。

「ミュウズたちは女だから、彼らを自由に虜にするものは、男だけだ。」（「秋」三）と芥川龍之介自身が皮肉な警句を披露したように、彼の作品は彼の思惑を裏切り「六の宮の姫君」が、彼固有の美しさを持った傑作であるのならば、「一夕話」は、作品としては駄作である。

第六短編集「春服」」（「春陽堂」大正十二年五月）の巻頭に「六の宮の姫君」を収録したこと、「一夕話」は、単行本に収録しなかったことから両作品についての作者自身の評価を見ることができる。

句集を持つ通人の世話になっている小ゑんは、世話になっている恩人を裏切り乱暴者の浪花節語りに身を任せて旦那を裏切るが、作中人物和田は彼女の行為を是認して通人を罵倒する。作中人物和田が作者の分身であるならば、罵倒される通人は、今井白楊と運命を共にした三富朽葉である。この時期芥川龍之介は、彼等に代表される象徴主義の詩風や早稲田文化の一つの文学的傾向に対して含むものがあったかも知れない。

「六の宮の姫君」の執筆二年後「文反古」（「婦人公論」大正十三年五月）において芥川龍之介は、二年前の自分の作品に対して自己批判をしている。

「まあ熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しいと云ふらしいのね。だって自活に縁のない教育を受けたあたしたちはどの位熱烈に意志したにしろ、実行する手段はないんでせう。お姫様もきっとさうだったと思ふわ。」

「彼女は不平を重ねながら、しまひにはやはり電燈会社の技師か何かと結婚するであらう。結婚した後はいつの間にか世間並みの細君に変るであらう。（中略）豚のやうに子供を産みつづけ」

「六の宮の姫君」の後日談のような作品「文反古」での作中のやり取りは、作品「六の宮の姫君」に対する評価の辛辣であったことの確証である。

「今昔物語」を典拠にしながら「六の宮の姫君」のみ他の作品にない脆い美しさを示して、独自の美しさを見せた。優美な美しさを保ちながら、受身に過酷な人生に耐えて破滅していく高貴な姫君の存在に引かれる作者は、明らかにこの時期人生の転機にあった。「曠野」も同じ「今昔物語」に典拠をかりながら成功した作品の一つである。「六の宮の姫君」の焼き直しの観のある「曠野」が、作品的成功を遂げているのは、同じく堀辰雄のこの時期の精神的な倦怠、諦観の反映があるためと思われる。菊池寛「六宮姫君」は、素朴な語りに見るべきものがあっても、技巧の全てを失い文学作品として読者に対する訴えを失っている。